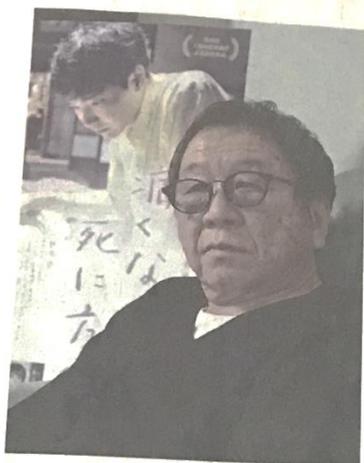


延命治療 考えるきっかけに

兵庫・尼崎で在宅医療に取り組む医師、長尾和宏さんの著書『モチーフにした「痛くない死に方」』が20日に公開される。71歳の高橋伴明監督の写真是、「延命治療について考えるきっかけになったら」と控えめに語る。

65歳を過ぎた頃から「自分はどういう死に方をするんだろ」と意識し始め、在宅医療や尊厳死について書かれた本を読んでいたところ、プロデューサーから長尾さんの著書の映画化を



「痛くない死に方」 高橋伴明監督

打診された。「自由に物語を作れるなら」と、すぐに脚本を書き上げた。

公私ともに挫折を味わった若い在宅医（柄本佑）が、長尾さんをモデルにした先輩の在宅医（奥田瑛二）の下で学び、成長していく。

若い在宅医が、末期の肺がん患者（宇崎竜童）に酒もたばこも許可するシーンには、「自分の願望だね」と笑いつつ、病院で管につながれるのではなく、自宅で最期の日々を楽しむながら死を迎えるがん患者に、「自分はこうありたい」という思いを重ねた」と明かす。

「1分でも1秒でも長く生きさせることが大事だ」ということも分かりますし、延命治療を否定するものではないのですが、自分は絶対に嫌。『あなたはどうぞで

すか』という、ささやかな提案です」

ベテランの俳優陣が味のある演技を見せる。宇崎演じる夫の死が近いと知った妻が突然、台所のシンクを洗い出すシーンは、演じた大谷直子の友人のエピソードを現場で採用した。

「感情が大きく揺れると、訳の分かんないことやっちゃうんだよねって。分かりますか、嬉しむより、そっちの方がいいと思ったのでいただきました」

撮影終了後、足のしびれが気になって病院に行ったところ、アルコール性肝炎など、数々の病気が判明。「心臓は動いているけど、もう全部ダメ。今、禁煙にトライしているところ」とあっけらかんと語る。

「生きている以上、現場に立ちたいなって思いはありますが、やりたい企画がそうそう実現するものじゃない。この年になると、毎回遺作だと思って撮ってますよ」